仙台北城下の外人屋について

GAIJIN-YA OF SENDAI IN SENDAI-HAN DURING EDO-ERA

岡田 悟*, 飯淵康一**, 永井康雄***

Satoru OKADA, Kouichi IIBUCHI and Yasuo NAGAI

Sendai was the capital of Sendai-Han. "Gaijin" means a foreigner and "Gaijin-ya" means a guest house for foreigner. Through the examination of historical materials, following results are ascertained;

- (1) Gaijin-ya was built at first in 1632~1641.
- (2) There were 5 Gaijin-yas in the latter half of 17th century, but 4 of them were disposed in 1694 and only one had existed until the end of Edo-Era.
- (3) Gaijin-ya was composed of Goza-no-ma (main guest room), Shisha-no-ma (room for messenger), Hiro-ma (entrance room) and cookroom.

Keywords: Gaijin-ya, guest house, Sendai, capital, disposal

外人屋、藩外者接待施設、仙台、藩主居館城下町、払い下げ

1. はじめに

仙台は藩政期を通じて伊達氏の城下町であり、広瀬川の西岸に仙台北城が築かれ、その東側に城下町が広がっていた。城下を南北に通過する奥州街道に沿って南町、国分町等が設けられ、また、奥州街道と直交する大町を西へ進むと仙台北城大手門に達していた(図1)。このような街路形態、町名は現在もよく遺されている。後述するように大町、および、国分町には外人屋が設けられていた。外人とは藩外の人の意で、外人屋は客館、客舎とも呼ばれた^{*1)}。外人屋や客館に類する名称を持つ他藩城下町の施設の例として、延岡の客屋、吉田(豊橋)の對客所等が見られる^{*2)}が、このような施設を対象として、平面構成にまで検討を加えた研究としては、筆者らがすでに発表した鶴岡の御使者宿、萩、山口の御客屋^{*3)}の他には、臼杵の御客屋敷^{*4)}等極めてわずかの例が挙げられるに過ぎない。

かつては、「他藩でいう本陣を仙台北藩では外人屋と呼び」(文献11)とされるように、外人屋と本陣とを同一視するのが一般的であり、本陣を対象とした既往の研究(文献13、14等)にも、城下に設けられた外人屋の類に特に着目した記述は見られない。しかし、街道に沿って線状に延びる宿場町と、宿場町を含む町場の他、侍町、城等の多くの要素から構成され面状に広がる城下町とでは、規模や性格に大きな相違があること、そして、従来研究が進められてきた

街道宿駅本陣と城下町に位置する外人屋等とが利用方法、敷地や建物の点で同一の性格を持つか否かについてはなお検討の余地があることが指摘されよう。従って、今後こうした外人屋等について数多くの事例研究を蓄積する必要が痛感され、本稿では仙台北外人屋の位置、平面構成、利用状況等の変遷を明らかにし、鶴岡、萩、山口等の例と比較しながら、その歴史的性格を考察したい。

2. 仙台北外人屋に関する史料

仙台北藩の出来事を編年体で記録した『伊達治家記録』(宮城県図書館蔵、以後『治家記録』と略称)には、外人屋の利用状況や払い下げに関する記述が数多く見られる。

現在、仙台北外人屋の遺構は存在しないが、数多く遺されている仙台北城下地図の中に、外人屋に関する敷地が描かれているものが2点ある。寛文8~9年(1668~9)の仙台北城下大絵図(図1、文献10所収)には、大町の敷地に「御外人屋」(図中○印)と書き込まれ、安政3~6年(1856~9)の安政補正改革仙台北府絵図(図2、同上)には、国分町の裏手に当る敷地に「外人屋御用地」(図中○印、ただし、ここは後述するように外人屋の主要部分が建てられていた敷地ではない)と書き込まれている。

また、外人屋の建築を描いた図は『御修履帳』、『朴沢家資料』、

* 共立女子短期大学生生活科学科 助教授・工博

** 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻 教授・工博

*** 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻
講師・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of the Science of Living, Kyoritsu Women's Junior College, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Urban Planning and Building Engineering, Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

Lecturer, Dept. of Architecture, Urban Planning and Building Engineering, Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

表 国分町外人屋絵図一覧

No	出典	標題	年代・経緯	図	備考
1	御修葺帳①	国分町検断中野太兵衛方御外人屋	元禄7(1694) 太兵衛二被下置候	図4	付属屋4棟の平面図
2	朴沢家資料	なし	なし	図5	
3	御修葺帳②	国分町西外人屋	安永5(1776) 類焼相成候	図6	ほぼ同内容
4	朴沢家資料	国分町外人屋	なし		
5	御修葺帳③	国分町外人屋	安永5類焼二付… 新規被相建事	図7	同一平面
6	御本陣図面	国分御本陣 米川十右工門	なし		
7	御修葺帳③	国分町外人屋	安政2(1855) 新規御建替	図8	

『御本陣図面』の各史料に計7点見られる。本稿ではこれら絵図に1～7の番号を付し、それぞれの出典、標題、および、絵図に書き込まれている年代、経緯をまとめて表に示した。これらからは平面、配置の状況が知られる。

『御修葺帳』は仙台藩作事方が建設・修葺を担当した建物の台帳であり、藩政期を通じて改訂されつつ複数作成されたことが知られているが、現在それらの内3冊^{*5)}が遺されている。それぞれが使用された期間は下記のように明らかにされている^{*6)}ので、本稿ではこれに従って順に①②③と番号を付した(①③は宮城県図書館蔵、②は東北大学蔵)。

『御修葺帳①』貞享3年(1686)～元禄7年(1694)頃

『御修葺帳②』安永年間(1772～)初頭～天保2年(1831)頃

『御修葺帳③』文化年間(～1817)末から40～50年間

②と③とは使用された期間が一部重複しているのに対し、①と②との間には約80年の空白期間がある。また、図1が描かれた時期は①が使用された期間に近く、図2が描かれた時期は③が使用された期間に含まれている可能性がある。①の目次から外人屋に関する部分を図3に示した。外人屋の図としては①②に各1点、③に2点の計4点が挙げられ、順に絵図1、3、5、7と番号を付し、それぞれ図4、6～8に示した。ただし、絵図1には外人屋そのものの平面図は描かれず、付属屋4棟の平面図のみが描かれている。

朴沢家は仙台藩作事方配下の大工の家柄で、同家の資料(仙台市博物館蔵)の中に、仙外人屋を描いたものが2点見出され、絵図2、4と番号を付し、絵図2を図5に示した。絵図4は絵図3に酷似している。『御本陣図面』(盛岡市中央公民館蔵)は盛岡から江戸までの奥州街道の本陣の間取りを描いたもので、その中の仙外人屋が描かれている頁を絵図6とした。ここに描かれる平面図は絵図5とほぼ一致している。

これら史料から、まず、『御修葺帳①』を中心に図1と図4を併せて17世紀後半の外人屋の状況を、次いで、『御修葺帳②③』と図2、6～8とを基に安永年間(1772～)以降幕末までの状況を明らかにし、最後に、『御修葺帳①』と『御修葺帳②』との間の期間(元禄8年～安永年間初頭)の外人屋の建築について推論したい。

3. 元禄7年(1694)以前の外人屋の位置、規模、および、構成

寛永10年(1633)に第1回目の巡見使が幕府から派遣されたのに対応して、『治家記録』寛永9年12月晦日条には「来正月中二国々へ上使下向ノ沙汰有ルニ付テ(中略)白石、大河原、岩沼、仙台ニ御宿三箇所ツツ造作ス」とあり、それ以降の巡見使は後述するように仙外人屋を利用していることから、第1回巡見使派遣以前には仙台には後に外人屋と呼ばれるような施設は存在していなかったと

推測される。外人屋の語は『治家記録』寛永18年(1641)11月5日条の「(荒川)馬之助殿仙台外人屋二着シ」が初見であることを鑑みると、寛永9年(1632)から18年(1641)の間に最初の外人屋が建設されたと考えられる。

『御修葺帳①』の目次には書き込みや貼紙がされ、図3はその状態を示しているが、これらを除くと、当初、外人屋として、

- 一、大町老町目御外人屋并丁切辻番所共
- 一、国分町中野太兵衛方御外人屋火遠見櫓(貼紙下)
- 一、国分町相沢平右衛門方御外人屋
- 一、国分町堀江八之允方御外人屋
- 一、国分町柴田甚左衛門方御外人屋

の5項が書き上げられていた。この目次は『御修葺帳①』作成時に書かれたと考えられ、従って、貞享3年(1686)頃には大町に1軒、国分町に4軒の外人屋があったことになる。また、国分町の4軒には「誰々方御外人屋」と人名が冠されており、この点が大町の外人屋の表現と異なっている。

3-1 大町外人屋の敷地、建物とその払い下げ

図1に示される外人屋敷地は、まさに大町の「丁切辻番所」とされる位置に相応しく、『御修葺帳①』の目次に言う大町外人屋に該当しよう。この目次の「一、大町老町目御外人屋并……」の項目の脇には小字で「此所御外人屋御家ハ左京殿へ被進、屋敷地表囲共二元禄七年奥田久和二被下置候事」と補記されている。これは『治家記録』元禄7年(1694)6月23日条に「三沢左京殿へ命セラル趣、古内新十郎隣屋敷へ元御座間并御次旦古損ト雖モ大町外人屋ノ家ヲ取集、輕ク造作セラレ賜ルヘシ」、および、同年7月7日条に「奥田休和御宮町ノ屋敷為御慰所召上ラレ、為替地大町外人屋屋敷ヲ賜フ(中略)外人衆御用ノ節ハ御用立様ニ輕ク造作スヘシ、造作料白銀三百枚ヲ賜フ」とあるのに符合する。即ち、大町外人屋の建物を三沢左京^{*7)}に、屋敷地を奥田休和^{*8)}に与えたことになる。『御修葺帳①』目次(図3)に「一、大町老町目御外人屋并……」とあるにもかかわらずこの項目に該当する頁が遺されていないのは、敷地建物の払い下げによって藩作事方の管轄下から離れたため、作事方で絵図を保管する必要がなくなり、抜き取られたからと考えてよい。また、この時払い下げられた大町外人屋には、御座間と御次とがあったことが上記の『治家記録』の記述から知られるが、それ以外に建物の部屋名、構成や敷地内の状況等を記した史料は見出せない。

3-2 国分町外人屋の敷地、建物とその払い下げ

『御修葺帳①』目次(図3)に挙げられた国分町の4軒の外人屋の箇所にも、大町外人屋の箇所と同様に、中野太兵衛方の項には「此所御外人屋家屋敷地共二元禄七年二検断太兵衛二被下候」(貼紙下)と、相沢平右衛門方、および、柴田甚左衛門方の項には「此所御外人屋家屋敷地共二御拂二被成置候」と、堀江八之允方の項には「右同断」とそれぞれ補記されている。また、中野太兵衛方の項については「国分町中野太兵衛方御外人屋」、および、上記の補記の部分に「国分町検断中野太兵衛屋敷二被相立候瓦御蔵并」と書かれた貼紙がされ、全体として「国分町検断中野太兵衛屋敷二被相立候瓦御蔵并火遠見櫓」という項目(図3)に置き換えられ^{*9)}、外人屋の語が見られなくなっている。

これら4項目に該当する頁は、相沢、柴田、堀江方の3箇所については遺されてなく、完全に払い下げられて藩作事方の手から離れた

と推定され、唯一、国分町検断中野太兵衛方に関する図4が遺されている。これには図として敷地外郭線と4棟の建物平面図が描かれている。右上の建物は梁行2間半、桁行15間で、2箇所に「門」と書き込まれ、建物の位置と平面とから長屋門と推定される。その右下の建物は5間×3間の規模で「御厩長五間よこ二間行間二方二半間ノ下屋」と書き込まれている。左側のものは「火見櫓二間二尺四方」と書き込まれ目次の「火遠見櫓」に、下側の建物は「瓦御蔵惣板敷」と書き込まれ目次貼紙の「瓦御蔵」に、それぞれ該当する。

また、図4の中央部には以下のように書き入れられている。

「国分町検断中野太兵衛方御外人屋表長屋拾五間御厩五間被相残候外右太兵衛二被下置候家数之覚

一、表長屋御外人屋境ノ北之方ヘ廿壹間	一、御廣間
一、御居間	一、御膳立所
一、御足輕衆番所こしかけ廊下共	一、御風呂屋
一、すそ場詰厩共	一、御厩拾五間
一、所々塀之分	一、閑所四ヶ所

右拾口之通元禄七年七月六日二御出入司木幡修理殿へ御作事横目竹村三之丞被為俾右太兵衛二被下置候由被仰渡候」

頭書きにある「御外人屋表長屋拾五間、御厩五間」は用途、規模から図4右上に描かれる2棟に当る。従って、外人屋の建物の内、これら表長屋と御厩とを残してそれ以外の「右拾口」が元禄7年に検断中野太兵衛に払い下げられたことになる。

以上から、図4には元禄7年の払い下げ後も作事方が管理することになった表長屋、厩、火見櫓、瓦御蔵の4棟が描かれていると判断される。従って、『御修復帳①』が使用されたと考えられる期間の中の最後期に当る元禄7年にこの頁が差し替えられて図4のようになり、差し替え以前の頁には、図4の4棟の他に払い下げられた「右拾口」が加わった状態が描かれていたと推定される。

さらに、「右拾口」に挙げられる建物を見ると、表長屋は「御外人屋境ノ北之方廿壹間」とある。図4右上に描かれる桁行15間の建物も同様に表長屋と呼ばれること、および、図面上この表長屋左端と敷地外郭の左側境界線との間の距離が約21間と判断されることから、図4で15間の表長屋の左に21間の表長屋が建てられていたと考えられる。そしてこの21間の表長屋は「御外人屋境ノ北之方」にあったとされること、および、貼紙後の目次項目に書かれるように火見櫓と瓦御蔵とが太兵衛屋敷内にあったことから、図4には外人屋の敷地とその北隣の太兵衛屋敷地とが描かれ、2棟の表長屋の間に敷地境界線があったことが知られる。また、表長屋は奥州街道に面していたと判断され、国分町の西側屋敷であったことになる。敷地奥行が図面上約26間であることも、国分町の敷地割りの手法にほぼ一致する^{*10)}。また、図4には御廣間、御居間等の規模、位置、相互関係等は書き上げられていないため、これらの詳細は不明である^{*11)}。

一方、『治家記録』元禄7年7月11日条には「国分町検断太兵衛二外人屋家二字表長屋二十一軒厩十五軒ヲ賜フ、引取り自分二修復シ置キ外人屋ノ御用二立ヘシ、給米三人分引続賜フ」とある。図4に書き上げられた「右拾口」の内、「表長屋御外人屋境ノ北之方廿壹間」および「御厩拾五間」が、ここに言う「表長屋二十一軒」および「厩十五軒」にそれぞれ該当しようが、この2棟以外の御廣間、御居間等については記されていない。『治家記録』によれば、太兵衛に払い下げられたのは図4に書き上げられている「右拾口」の内、

上記2棟のみということになり、図4の記述と一致しない。

相沢、堀江、柴田方の御外人屋については、敷地や建物に関する具体的な記録が見られないが、目次に太兵衛所と同様に「誰々方御外人屋」と表現されることから、やはりそれぞれの居家屋敷が外人屋屋敷に隣接する形であったと思われる。元禄頃における国分町の敷地割りや居住者を知り得る絵図、史料は存在せず、図4に描かれる敷地、および、他の3軒の外人屋の位置を知ることはできない。

4. 安永年間(1722～)以降の外人屋の位置、および、規模、構成

絵図3～7は、いずれも、表に示した標題、および、内容から国分町外人屋を描いたものであることが分る。まず、絵図3と絵図4とがほぼ同内容であることから絵図3を図6に描き^{*12)}、絵図4にあって絵図3にない書き込みを()を付けて図6に書き入れた。次いで、同様に絵図5と絵図6とが同一平面であることから絵図5を図7に描き^{*13)}、絵図6にあって絵図5にない書き込みを()を付けて図7に書き入れた。最後に、絵図7を図8に描いた^{*14)}。結局、絵図3～7に表現される建物は、図6、7、8の3種類に分類される。

また、表にも略記したように、図6には「安永五年四月十七日類焼相成候」とある貼紙が付され、図7には「国分町外人屋安永五年類焼二付、御絵図之通新規被相建事」と書き込まれていて、図6から図7へと建替えられたことが分り、また、図8には「安政貳年国分町外人屋新規御建替御絵図」と書き込まれている。これら絵図を基に、まず、この外人屋敷地とその位置を検討し、次いで、各時期の平面構成を検討する。

4-1 安永年間以降の国分町外人屋の敷地、位置

図6には敷地間口寸法は12間と書き込まれているが、これは街道側に間口いっぱい建てられた長屋門の桁行寸法と一致し、また、他の建物図面とも矛盾しない。この長屋門、および、それに付属する厩の形状、間取りが図7に共通することから、両者は同一敷地であることが判明し、この部分は安永5年の類焼時に焼失を免れた可能性がある。同時に、図6、7に方位が書き入れてあり国分町の西側屋敷であることも分る。図6で外人屋敷地西側に描かれる縦長の敷地は外人屋敷地と御立除口で結ばれ、この図が載せられている

『御修復帳②』目次で国分町外人屋の次に記される「同所御立除屋鋪」に当ろうが、これと、図7でやはり外人屋敷地西側に描かれる縦長の敷地とは、形状、北側の門の位置、蔵が建てられていること等の共通性があり、同一敷地であったと考えられる。外人屋敷地奥行寸法については書き込みがなく、図面上では図6で約25間、図7で約28間と算出されるが、実際には同一寸法であったと思われる。御立除屋鋪は図6の書き込みから縦38間、横9間であったことが知られる^{*15)}。

次いで、図7と図8とを比べると、両者に共通して描かれる建物がなく、また、敷地間口寸法も12間から約16間半に拡大されている。一方、図8においても図6、7と同様に、外人屋敷地後方に御立除屋敷が描かれているが、外人屋敷地がこれに突出している。御立除屋敷に寸法の書き込みは見られないが、図で下端に「立町サカイ」と記されている。図8のように建替えられた直後の時期に当る安政3～6年に描かれた図2で、外人屋御用地の南辺が立町の北側屋敷の北辺に一致していることから、図8の御立除屋敷と図2の外人屋

御用地は同一のものと判断してよく、図8の外入屋敷地は国分町通りとこの御用地とに挟まれた位置にあったことになる。さらに、外入屋御用地は元櫓丁南側屋敷であり、この敷地奥行は約38間であったと判断され^{*16)}、図6に描かれる御立除屋敷の南北方向の寸法とほぼ一致することから、図6、7に描かれる御立除屋敷も図2の外入屋御用地と同一のものと考えられる。その場合、図6、7の御立除屋敷北辺は元櫓丁の通りに面することになり、ここに門が描かれることもこれに符合する。また、図8に「此所取替地之ハ地面長式拾五間二横三間」と書き込まれていることから、図6、7に描かれる外入屋敷地奥行も同様に25間であったとしてよい。従って、図8に「御建替」と書き込まれていることを考え併せれば、図8の敷地は図6、7の敷地とほぼ重なる位置であったと判断される^{*17)}。前述のように『御修覆帳②』と『御修覆帳③』とは、重複しながら安永年間初頭から幕末まで使用されており、図7と図8の間の期間に別の外入屋が建てられていたとは考え難く、図7に描かれる建物が安政2年に図8のように建替えられたと考えてよからう。

4-2 安永5年(1776)類焼の国分町外人屋の平面構成

図6は、藩が管轄する建物とそれ以外の民間のものとを区別して表現している^{*18)}。長屋門内に設けられた門を入って斜行すると式臺に達する。書き込みに着目すると、部屋境3箇所「襖めし会」と書き込まれ、その両側の2室が続き座敷と考えられる。即ち、式臺が付けられた廣間はその南隣の部屋と、床と棚を備えた書院は東隣の部屋と、そして、両者の間の床のある部屋はその東隣の「次」と書き込まれた部屋と続き座敷となる。一方、街道方向へ突出する形で大所、拭縁、土間からなる台所部分が設けられている。

4-3 安永5年(1776)類焼後建てられた国分町外人屋の平面構成

図7は御立除屋敷内の蔵をも含めすべて黄色に着色されている。座敷部分を見ると、部屋名等の書き込みは見られないが、玄関が付された廣間があり、その奥に2組の座敷が続き、「フスマメシ合」等の書き込みが見られ、これらは図6と共通する。廣間、および、御上段の部分に入側が設けられている点が図6から拡充された点と言える。台所部分や湯殿の位置は図6を踏襲している。また、建物全体が図6より後退した位置に描かれ、門から玄関までの距離が図6より長くなっているが、前に述べた如く、図面上で敷地奥行寸法は実際より長く描かれていることが想定され、門から玄関までの距離も図6と図7とで差がなかった可能性がある^{*19)}。

4-4 安政2年(1855)に建替えられた国分町外人屋の平面構成

図8に描かれる長屋門は図6、7と同様の形式、間取りながら、門部分の間口が拡大した形となり、建物は図7よりさらに後退した位置に描かれている。3組の座敷が配置される点は図6、7と共通し、手前側からそれぞれが御廣間、御使者ノ間、御座之間と書き込まれているが、図7に比して御座之間裏手の御納戸の部屋面積が広がり、御使者ノ間とその裏手の部屋との間に御エン通が設けられ、平面規模は拡大している。また、玄関の脇には、図6、7には見られなかった布板、中ノ口が描かれている。台所部分は図6、7と同様の位置に設けられているが、図6、7に比して面積が減少している。また、図6、7では建物の大部分が黄色に着色されていたが、図8では布板、中ノ口、台所棟が着色されておらず、この部分は藩作事方の担当外であったかとも思えるが、詳細は不明である。

5. 元禄8年(1695)～安永年間の外人屋の位置、規模、および、構成

元禄7年の払い下げに当っては、すでに記したように大町外人屋の敷地を与えられた奥田休和に「外人衆御用ノ節ハ御用立様ニ」と、また、国分町の外人屋建物を払い下げられた中野太兵衛に「外人屋ノ御用ニ立ヘシ」とそれぞれ命じていることが『治家記録』に示されている。元禄8年以降の状況を『治家記録』で見ると、大町外人屋と記される例は見られず、国分町外人屋の語は元禄9年^{*20)}以降しばしば見られる。ここに言う国分町外人屋は、元禄7年まで外人屋であった太兵衛所を仙台藩主が元禄15年(1702)まで引き続き東照宮祭礼日に定期的に利用していた^{*21)}ことから、元禄15年までは図4に描かれる太兵衛所であったと推測される。

ところで、図6に描かれた建物がいつ建てられたかを直接示す史料は見出せないが、『御修覆帳②』に描かれる各図の書式から^{*22)}、これが作成された安永年間初頭までには建築されていたと考えられる。図5は絵図2を示したものである^{*23)}が、この敷地^{*24)}と長屋門の形状は図6、7に共通し、敷地内の書院、式台・廣間、台所部分の配置状況も図6～8に類似する。しかし、2室構成の大書院のさらに奥に小書院1室が設けられる点、書院と廣間との間に三ノ間1室^{*25)}がある点、および、「明地」とある中庭を設ける点が図6～8と相違する。

図5には標題も年号も記されていないが、外人屋の建設・修覆を担当していた藩作事方の配下にあった工匠家に遺されていた図であること、上記のように敷地、建物に図6～8と共通性、類似性が見られること、図6以降幕末までの変遷は図6→図7→図8と連続していること等から、図5は図6、7の敷地に図6以前に実際に建てられていた外人屋、あるいは、その計画案、もしくは、安永5年類焼後の計画案を描いたものと考えられる。

図5～8に描かれる平面構成を、図4の書き込みに示された元禄7年時点での外人屋を構成する主要部分と比較すると表長屋、御廣間、および、台所部分としての御膳立所が共通するが、主たる座敷、即ち、図4の御居間、図5の小書院+大書院+三ノ間、図6～8の書院(御上段、御座之間)+御使者ノ間については、これら3者相互の関係は必ずしも明確でない^{*26)}。また、図5以降の敷地と図4の南半部分である外人屋敷地との関係は、共に国分町西側屋敷である点が共通するものの、図4の敷地の位置が明確でなく、また、図4の外人屋敷地間口、付属屋の状況は図5～8と共通するものが見られない。

以上のように、図4から図5～8への敷地、建物の連続性には不明な点が多いが、図4が『御修覆帳①』における外人屋関係の頁の中で、唯一抜きとられずに遺され、ここに描かれるものが元禄15年までは外人屋として利用されたと考えられること、図5、あるいは図6に描かれる外人屋が安永年間初頭を遡った時期にすでに存在していたと考えられることを考慮すれば、国分町西側屋敷において外人屋が藩作事方によって建設、維持管理される形で受け継がれた可能性が指摘できよう。従って、『御修復帳①』に見られる書き込みからは、元禄7年にすべての外人屋建物が払い下げられたようにも読み取れるが、実際はその後国分町太兵衛所の外人屋1軒は存続し、元禄15年以降に敷地、建物が改められ、その後の図面も引き続き『御修覆帳②③』に載せられたと考えられる。

6. 外人屋の主な利用者とその利用方法

6-1 他藩大名

参勤交代時に仙台を通過する大名は、北から松前、八戸、盛岡、一関の4藩主であるが、この内一関藩主は仙台藩主と姻戚関係にあり、前3者とは区別して考える必要がある。寛延4年(1751)の「御町奉行手控」(斉藤報恩会蔵、文献5、p.527所収)に

「一、御大名様方外人屋御屋之節、麻上下二而罷出候事(中略)
一、下総守様御通之節も供廻り右同断

但、多ハ御寓ニ被成候二付、御着之節罷出……」

とあって、下総守(一関藩主)は御大名様方とは区別されており、大名の外人屋での昼食時の注意には触れているが、大名の宿泊時に関する記述は見られず、一関藩主は宿泊することが多いと但し書きで書かれている。

『治家記録』においても、一関藩主の外人屋宿泊に関する記述は数多く見られ^{*27)}、松前藩主は仙台藩主と比較的懇意であり、後述するように外人屋宿泊例が散見される。これらに対し、盛岡、および、その支藩である八戸の藩主が外人屋を利用した例は全く見られない^{*28)}。こうした利用時の外人屋建物の具体的な利用方法を記した記録は乏しいが、『治家記録』元文5年(1740)10月15日条に松前志摩守が「国分町客館二止宿」とあり、志摩守が外人屋に到着後、仙台藩主が外人屋へ志摩守を訪問し、その時志摩守は「玄関二志摩守殿迎ラレ」とあって玄関で仙台藩主を迎えている。その後外人屋内で会面しているが、その場所は記されていない。

また、『治家記録』や『御修履帳』では外人屋、客館等と呼ばれたが、盛岡藩の史料の『御本陣図面』では「御本陣」と呼ばれ(表)、寛延4年(1751)の『増補行程記』(盛岡市中央公民館蔵)では「御飯屋」とされ、同一施設が藩によって異なる名称で呼ばれており、興味深い。

6-2 他藩大名よりの使者

外人屋を利用せず仙台北城下を通過するだけの大名は、使者を派遣するのを通例としたが、『治家記録』宝永7年(1710)10月9日条に「松前志摩守殿仙台北城下通過、国分町外人屋へ使者工藤瀬兵衛ヲ以テ太刀……到来」とあるように、こうした使者への対応は外人屋で行われた。また、同元文4年(1739)6月17日条には「於仙台去十一日南部修理太夫殿ヨリノ使者橋本左兵衛国分町客館二到着(中略)大條監物、互理石見速二客館二到テ答辞ヲ示ス、使者同夜帰邑」とあり、参勤交代に付随しない使者にも外人屋で対応していた。図8に見られる御使者ノ間がこれら使者に対応する部屋ではなかったかと推定される。

6-3 巡見使

巡見使は藩政期を通じて10回派遣されたが、第3回に当たる天和元年(1681)の場合、『治家記録』同年9月29日条に「巡見目付衆保田甚兵衛殿、佐々喜三郎殿、飯川傳右衛門殿今昼外人屋へ到着」とあり、翌日の条に「仙台発足」とある。天和元年は『御修履帳①』が使われた期間の直前で、元禄7年(1694)の払い下げ以前に当ることから、外人屋が複数存在していたと考えられ、また、前述の寛永10年の巡見使についての記述で「御宿三箇所ツツ」とあることや、他藩の例^{*31)*11)}でもやはり3名が3箇所に分かれて宿泊していること等から推して、保田ら3名の巡見使はそれぞれ異なる外人屋を利用したと考えられる。

これに対し、元禄7年以降、外人屋が国分町の1軒のみとなった時期では、藩作事方支配の大工の勤書(文献6)に、天保9年(1838)の巡見使について「御巡見衆御下り二付、外人屋並両替所星久四郎所三御宿御補理方相勤候」とあり、3名の巡見使の内の1名の宿泊に用いられた^{*29)}。

6-4 検使

他藩に預けられている謫人が死亡した場合、死体検視のため幕府から検使が派遣された。松平越後守家来小栗第太郎、帯刀、伊八郎の3名が仙台藩へ預けられ、宝永7年(1710)に第太郎が死亡して検視が派遣された時は、前もって幕府より「検使事畢ラハ即刻帰ラル、城下二止宿セサル格例ナレハ近辺ノ駅二宿スヘシ、享応無用ナリ」と申し渡されている(『治家記録』同年12月16日条)。実際、この時の検使2名は12月24日条に「長町駅(仙台南の奥州街道宿駅)ニ到着」、翌25日条に「国分町客館ニ到着(中略)第太郎屍検察畢テ客館ニ帰ラル(中略)長町駅ニ止宿セラル」(同)とあって仙台北城下に宿泊していない。しかし、帯刀死亡時の検使は国分町客館に宿泊している(同正徳3年1月10日条)。八戸藩へ派遣された検使が仙台を通過した際にも、外人屋で宿泊した例が見られる(同延宝4年1月13日条)。

6-5 上使

先に外人屋の語が初見されるのが寛永18年(1641)の『治家記録』であることを示したが、『治家記録』に見られる外人屋利用例の内、これを含む最初の5回は、いずれも、将軍家から御鷹の鶴下賜のため派遣された上使の例であった。これら5回は、いずれも早朝、もしくは、未明に外人屋へ入り、仙台北城へ登城し、その後一旦外人屋へ戻り、その日の内に外人屋を発して、仙台南にある奥州街道宿駅の増田、中田、岩沼のいずれかに宿泊し、外人屋を宿泊に利用していない。これは検使の場合と共通する。最後の5回目の上使が派遣されたのは慶安2年(1649)であり^{*30)}、上述の他藩大名から検使までの4種類の外人利用例が藩政期を通じて見られたのと対照的である。同時に、上使の例は、将軍が鷹狩で猟った鶴を仙台藩主に賜うためのもので、これら4種類の利用例に比べて儀礼的な色彩が強い。5回の上使派遣の期間は外人屋が複数存在した時期に当たると考えられるが、どこの外人屋を用いたかは記されていない。

6-6 仙台藩主

毎年、東照宮祭礼当日に歴代藩主は国分町外人屋で祭礼行列を見物した。『治家記録』元禄13年(1700)9月17日条には「国分町検断太兵衛所二入セラレ於御座間昨日外宮熊野新宮今日内宮祭礼二付テ御拝アリ(中略)終テ衣服ヲ改ラレ朝應後見物所二御出渡物御覧」とあり、同元文5年(1740)9月18日条には「国分町客館二入セラル(中略)巳刻親所二御出於廣間高間傳右衛門拝謁」等とある^{*31)}。これらの用例では、御座間では藩主が祭礼の御拝を行い、式台の付された廣間では家士が拝謁した。

また、実際に祭礼行列を見物した場所とされる見物所、親所は、図8において長屋門内の御覧所、御次と書き込まれた2室が該当しよう。街道に面して行列見物に適した位置であり、また、こうした間取りが図6から受け継がれていること等から推して、藩主の祭礼見物を考慮した平面計画であったと考えられ、通常の宿駅本陣には見られないものと言えよう^{*32)}。

7. 接待、および、維持管理

仙台藩では外人宿泊時の対応を藩士に命じ、その役職名として外人屋馳走役、外人屋賄方本^レ役、客館饗応役等の名が見られる。

『治家記録』正保4年(1647)12月18日条に「外人屋馳走役ヲ久シク勤ムルノ功ニ依テ」黒沢久兵衛を加増している記事が見られ、早い時期からこの職が設けられていたことが知られる。『治家記録』元禄8年(1695)10月21日条には「永野兵七郎外人屋賄方本^レ役数年勤仕ニ依テ加増」とあり、元禄7年の払い下げ直後も同様に藩士がこうした役に任じられていた。これらの職務内容については、『治家記録』享保元年(1716)9月24日条に戸沢上総守よりの使者が書状を持って「客館ニ来着」した時「但木勘解由客館饗応役言上」とあって取次の役をした例が記され、その一端がうかがえる。このように藩士が任じられる点も、宿駅本陣とは大きく異なる。

一方、大町3～5丁目は町役として年間10人を外人屋御賄方御人足として出す義務があり(文献2, p. 125)、城下の町場からも町人が外人屋のための人足として動員されていた。

8. 仙台外人屋の転換期としての元禄7年(1694)

以上の検討から、元禄7年(1694)を境に外人屋の数が減りこれ以降国分町外人屋1軒のみが幕末まで藩作事方の管理下にあったこと、また、利用者の点からは、将軍家よりの上使派遣は1600年代前半に限られる点が注目される。このような変化が見られた1600年代後半における仙台での建築史上の重要な出来事として、仙台城二の丸改造が挙げられる。

仙台城は、慶長年間に本丸が建設され、寛永年間に二の丸が建設されてこれが中心殿舎となった。この二の丸は天和から元禄初年にかけて大きく改造された。即ち、従来の小広間、書院を中心とした接客関係に重点を置いた平面構成から、藩主対家臣の君臣関係を主軸とする平面構成へと改造された。その結果、小広間が対面所と呼ばれ書院が失われたことが指摘されている。また、この改造の背景として、将軍、上使、公儀役人、他藩主、旗本等の身分的に対等かもしくはそれ以上の人物との仙台城における交渉の可能性が極めて低くなったこと、および、藩主権力が強化されたことが指摘されている(文献7, p. 22～46)。藩主権力の強化は、仙台北城下に対して、城下周辺の郷六、若林、宮町における別荘や下屋敷の建設^{*33)}といった形で現れた。

将軍家よりの上使は、藩主と身分的に対等かもしくはそれ以上の人物に当り、しかも、5回の上使は仙台城へ登城した際には、二の丸小広間で上意を仰渡し、書院で祝儀が行われた^{*34)}。小広間、書院は天和～元禄初年の改造でまさに改称、廃止された部分であった。藩政初期は未だ将軍家の全国支配が安定した時期とは言えず、諸大名に対して将軍対大名という上下秩序を固める必要があり、御鷹鶴下賜の上使はそのために大名領内の居館にまで派遣されていたが、支配体制が安定するのに伴い廃止された。こうした変化が仙台城二の丸改造の原因の1つであったと考えられよう。

将軍家からの上使が、当時複数存在していた外人屋の内どこを用いていたかを推測すると、上使の目的、行動から、仙台城大手への道筋上にあつて仙台城へ登城する外人の利用に最も都合がよい大町外人屋が相応しい。『御修履帳①』目次(図3)において大町外人屋が国分町外人屋と異なって「誰々方」と冠されてないこと、およ

び、図1に示す城下絵図で国分町外人屋が町場に埋もれて位置が示されていないのに対して大町外人屋敷地が明示されていることは、大町外人屋の方がより藩營的な色彩が濃く、重視されていたことを示している。その上使が廃止となれば大町外人屋の重要性は著しく低下し、元禄7年の払い下げにつながったと考えられる。従って、元禄7年の大町外人屋の払い下げは、元禄初年の仙台城二の丸改造に呼応する城下町内での出来事であったと言える。

これに対し、国分町外人屋は、奥州街道に面する点で、仙台城へ登城する外人よりもむしろ仙台北城下を通過する外人の利用に適した位置にあり、藩政期を通じて利用される性格を持ち続けていた。元禄7年に国分町外人屋も払い下げのように計画されたにもかかわらず、国分町の1軒だけは、こうした性格の故に藩政期を通じて藩作事方が建設、管理する公的な施設として存続したものと思われる。

9. 国分町外人屋の平面構成の特徴

図4～8に示される国分町外人屋の構成の特徴は、利用状況や建設・維持管理・運営方法を考慮に入れ、本陣や毛利藩、庄内藩の御客屋等^{*3)}と比較検討すると、以下のように要約できる。

- [1] 街道宿駅本陣と同様に街道に面する敷地に設けられていたが、宿駅本陣では敷地内に本陣家居家が設けられるのが常である^{*35)}のに対し、外人屋にはこれに当たる部分は見られない。これは、建設・維持管理・運営に藩が直接関与する体制であったので、民間側の本陣家に相当するものが必要でなかったことによるとと思われる。鶴岡の御使者宿では、城下町内の大庄屋家が維持管理を担当し、これとは異なる構成が見られる。
- [2] 敷地間口はぼいっばいに長屋門を設けていたが、萩、山口の御客屋に見られた御成門は見られない。廣間、御座間、台所を不可欠の構成要素とする点は、他藩の御客屋等や本陣に共通する。建替えを通じて敷地、建物の面積が維持、もしくは、拡大されていることから、仙台北城下における外人屋の機能がこの間に縮小することはなかったと考えられる。
- [3] 最終的には、図8に見られるように、上記の構成に御使者ノ間、布板、中ノ口を加えた構成に達した。このような御使者ノ間も、宿駅本陣には見られず、使者の来訪が頻繁な城下町特有の事情によるとと思われる。萩、山口の御客屋にも廣間、御座間とは別の2室構成の座敷が見られた^{*36)}が、鶴岡の御使者宿にはこれに類するものは見られない。
- [4] 台所部分は図7から図8への幕末の建替え時に大幅に面積が減少したが、検使や上使が宿泊に利用しなかったことに見られるように、宿泊機能より応接機能に重点が移された結果である可能性が指摘される。毛利藩においても、萩御客屋に巡見使は宿泊せず藩主と出会う場として用いられ、幕末の山口御客屋で同様に台所部分の面積が減少している。
- [5] 長屋門内に藩主祭祀行列見物用の御覧所が設けられ、藩主も外人屋を利用した。藩主の利用は、萩、山口、鶴岡の例には見られない。

10. 結び

仙台北城下の外人屋は寛永9年(1632)から寛永18年(1641)までの間に最初に建設され、元禄7年(1694)を境に大きくその様子が

変化したことが知られた。この変化は、将軍と諸大名との立場の確立に伴う全国レベルでの変化に起因したものと考えられる。

幕末まで存続した国分町外人屋には、同じ武士休泊施設として本陣や御茶屋等と共通する点が認められる一方で、他藩城下町の御客屋等と共通し本陣には見られない、城下の施設としての特徴を指摘することが出来、さらに、仙台特有の事情によるものが見られる。

仙台北外人屋のような藩、あるいは、幕府が営む御茶屋等が藩政期中に廃止、もしくは、払い下げになる例は他にも見られ³⁷⁾、事例研究を蓄積することによって全国を視野に入れた考察が可能となろう。

〔謝辞〕 本稿をまとめるに当たり、史料・絵図に関して宮城県図書館、仙台市博物館、盛岡市中央公民館の協力を得た。付記して謝意を表したい。

注

- 1) 外人屋の読み方を具体的に示す史料は見出せないが、『仙臺郷土研究』復刊第16巻第1号特集仙台北藩歴史用語辞典（仙台北郷土研究会、1991.6）では「かいじんや」としているが、本稿でもこれに従った。また、用例からみても外人屋は客館、客舎よりも数多く用いられている。
- 2) それぞれ「有馬家中延岡城下屋敷付絵図」（延宝3～天和3、明治大学刑事博物館蔵）、「吉田宿絵図」（元治元年、豊橋市美術博物館蔵）等による。
- 3) 岡田悟、飯淵康一、永井康雄「庄内藩における鶴岡、湯田川、藤嶋の御茶屋について」（『日本建築学会計画系論文集』第513号、pp.267～274、1998.11）、岡田悟「毛利藩における萩、山口の御客屋について」（同第516号、pp.235～241、1999.2）
- 4) 北野隆「白井藩の「御客屋敷」について」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』F分冊、pp.1551～1552、1994.9）
- 5) ②③には御修置帳という表紙が遺されているのに対し、①には表紙が欠落し『宮城県図書館伊達文庫目録』では「仙臺藩封内神社佛閣等作事方役所修繕二属スル場所調」という書名で載せられ、版も②③より小さいが、内容、書式等が②③に共通し御修置帳としてよい。また、②には写本（斎藤報恩会蔵）があるが、②と同内容なので本稿では対象としていない。
- 6) 阿部和彦「仙台北藩における「御修置」制について（その1）「御修置帳」年代考」（『日本建築学会東北支部研究報告集』第48号、pp.7～14、1986.10）
- 7) 4代藩主伊達綱村の母三沢初子の弟、伊達家御一門に列し、前沢に居館を持ち3000石を知行した。
- 8) 泉州出身の商人で、藩に金銭を融通した功によって藩士に取り立てられた。文献9巻之十二、平土300石奥田氏の項に「元禄七年七月賜老于大町」とあるのがこの時の出来事に対応する。
- 9) 検断については文献4 p.2に「藩によって町役人の呼称は一定していないけれども、仙台ではその主座になったものを検断、その下位にあって検断を補佐するものを肝煎（人）と言っていた」とある。
- 10) 文献11に「寛文5年の定では町屋は表六間裏二十五間の百五十坪となっている」とある。町割りには戦前まで藩政期のそれが受け継がれ、例えば大正15年の『仙臺土地賃典』（川名文明堂発行、東北大学蔵）等の地図と現在の地図とを対照させてみても、国分町町屋敷の奥行は約25間と算定できる。
- 11) 筆者らが毛利藩や庄内藩で武士の休泊に用いられた施設を対象に行ってきた注3、および、岡田悟、飯淵康一、永井康雄「庄内藩における清川御茶屋について」（『日本建築学会計画系論文集』第485号、pp.173～182、1996.7）、同「庄内藩における温海温泉の御茶屋と御本陣について」（同第500号、pp.229～236、1997.10）、岡田悟「毛利藩における三田尻御茶屋について」（同第444号、pp.127～137、1993.2）、岡田悟「毛利藩における上関御茶屋について」（同第506号、pp.141～148、1998.4）等から、御廣間は式台の付される番所的な広間で、図4に描かれる長屋門内に2ヶ所設けられた門の内、主たる門と考えられる北側の幅の広い方に入って到達する位置に、御居間は利用する武士の居所であり、御廣間の奥に、御風呂屋は御居間に接続する位置に、御膳立所は台所部分に相当し、長屋門内の通用門に相当する南側の幅の狭い方の門に入って到達する位置にそれぞれあったのではないかと推測される。
- 12) 原図には塙、板戸、連子等の間仕切を示す書き込みがされているが、図6では本文の説明に必要なものを除いて省略した。なお、敷地間口12間を基に部屋寸法が分り、書院と書き込まれた部屋は3間×2間半の15畳である。外人屋本体部分の縮尺は図5～8で統一して描き、また、各図で葦の字は台と簡略化して書いた。
- 13) 原図には連子、こしせうし、板戸等の間仕切を示す書き込みや、部屋毎に天井長押等の書き込みがあるが、図7では図6と同様に省略した。
- 14) 図7原図が約1/100で描かれているのに対し、図8原図は約1/200で貼紙に描かれ、明らかに『御修置帳③』完成後に加えられたものである。図5と同様に間仕切を示す書き込みや、部屋毎に畳数、天井長押等の書き込みがあるが、図8では省略した。また、図8原図では長屋門内の御納戸と書き込まれる部屋は図面上では6畳の形、大きさであるが、8畳と書き込まれ、図8では8畳間に描いた。
- 15) 外人屋敷地間口12間と比べて、御立除屋敷は明らかにこれよりも縮小された縮尺で描かれ、また、「小軒入長十郎自分屋」には「式間半二四間」と、「外人屋御道具蔵」には「一間半二長三間」と書き込まれているが、これらも外人屋本体よりも縮小された縮尺で描かれている。
- 16) 大正15年の『仙臺土地賃典』（注10）等と現在の地図との対照による。
- 17) 図8に書き込まれている「取替地」の意味は不明であるが、図7に描かれる外人屋敷地の内、北側間口3間分が図8の取替地であり、これを提供する代わりに南隣7間半分の敷地を新たに外人屋敷地に編入し、計間口16間半の敷地（図8）となった可能性がある。御立除屋敷に描かれる井戸が図7と図8とで同一の位置であったとすれば、この仮説に符合する。

- 18) 図6原図では、「上より被建下候、此向御修置不被成下候事」と書き込まれている。「小軒入長十郎自分屋」以外の建物は黄色で着色され、黄色部分が藩作事方方の担当範囲を示していると考えられる。敷地周囲の塙も同様で、「自分」と書き込まれていて御立除屋敷境の塙は2本線で描かれ、藩作事方担当と思われる1本線の塙と区別して描かれ、また、一部塙が描かれていない部分には「此境塙拾間程之所南隣自分修置可然由享保四年被仰渡御下知」と書き込まれ、実際には塙があり、南隣家の「自分修置」であって藩作事方担当分に含まれないため描かれていない事情が理解される。なお、絵図4では塗り分け方が異なり、廊下、縁側部分のみが黄色に着色されている。
- 19) 絵図6では建物の位置は図7よりさらに後退して描かれ、長屋門も外郭線のみが描かれている。絵図6には西側の御立除屋敷は描かれてなく、また、図7の北側に接する、間口約4間半の敷地が描かれ、この敷地が街道に面する部分に通用門が描かれている。絵図6にその名が見える米川十右工門は国分町上席検断であった（文献4 p.4）が、絵図1に見られる国分町検断中野太兵衛との関係は不明である。米川家の屋敷は明治9年に国分町と元楨丁の交差点の南西角にあり（文献8、p.37）、4～1で示した外人屋敷地の北に当る。
- 20) 『治家記録』元禄9年8月11日条に仙台北藩主が「辰刻伊達安芸殿へ入セラル（中略）直二国分町外人屋二入セラル奥御出馬二就テ行装セラル御免駕」とある。また、単に外人屋とのみ記す例も、同元禄11年7月15日条以降散見される。
- 21) 毎年9月17日の東照宮祭礼日に歴代藩主は東照宮へ参詣後、国分町で祭礼行列を見物するのを恒例とした。祭礼当日に藩主が江戸上府中であつたり、健康上の理由で参詣しなかったり、『治家記録』の記述が簡略で行列見物の様子が記されていないからしているため、見物の場所が知られるのは全体の3割程度であるが、『治家記録』で見物場所が「国分町検断太兵衛所」とされるのは明暦3年（1657）、元禄9、13、15年でありその後は見られないのに対し、「国分町外人屋（客館）」とされるのは天和3年（1683）貞享2年（1685）、および、正徳4年（1714）以降である。元禄7年（1694）以前については太兵衛所への外人屋があつたことから両者は同一のものと考えられ、明暦3年の例では、藩主忠宗の三男の日記には同日のことが「長柄にて其より国分町外人屋へ殿様御出被成候、直二参、御まつり見物申候」（文献12）と記されている。
- 22) 『御修置帳②』に描かれる図面内、元禄8年（1695）～明和7年（1770）に再建・新築されたことが明らかな建物は「御修置帳②」が作成された時点で統一した書式で描かれたことがすでに指摘され（注6）、図6はまさにこの書式で描かれている。
- 23) 図6～8とは異なって黄色の着色はされていない。また、建具の位置を朱線で引いて壁の墨線と区別して描き、建具の箇所には障子、板戸等の書き込みがあり、部屋毎に長押、釘隠し等の書き込みがあるが、これらは図5では省略した。
- 24) 図5では図6以降に描かれる御立除地に相当する敷地は描かれていないが、図6と同様の位置に井戸が描かれていること、蔵が描かれていること、外人屋敷地から通じる門が描かれていること等、図6、7との共通性が認められる。やはり同様の敷地に設けられていて図では省略された可能性が高い。
- 25) この三ノ間は、部屋の配列からは大書院→御次→三ノ間、あるいは、御廣間2室に続く三ノ間という3室構成の座敷の一部とも考え得るが、いずれの場合も御次に当る部屋と直接接していないこと、御次に当る部屋に床が備えられていないのに三ノ間には床があること等から推して、本稿では独立した1室と判断した。
- 26) 図5のような大書院+小書院という組み合わせは上層武士住宅に多く見られる。他藩の御茶屋の例では、毛利藩の三田尻御茶屋（注11）において、御座ノ間、黒書院、御書院を持つ構成が安永～天明の改築により御座ノ間のみに変化している。
- 27) 一閣藩主は参勤交代時に外人屋を利用するのを恒例とし、享保10年から15年までの6年間は毎年利用したことが『治家記録』に見られる。2泊して真中の日に仙台北城へ登城する例が多い。
- 28) 享保18年4月15日の『治家記録』に江戸にいた仙台北藩主が南部藩江戸屋敷に使者を遣わし「参府往還ノ時ハ城下ニ寓宿セラル他日、他日会話ヲ期セラル旨ヲ告ラル」とあることから利用していない様子がうかがわれる。
- 29) 両替所、星久四郎所は共に、国分町の南に続く南町（図1）にあった。前者は藩の施設で「御修置帳」に載せられ、後者は商家で、寛政13年に脇本陣を併せ付けられたとある（文献1、p.133）。
- 30) 仙台北藩の江戸屋敷に御殿の鶴下賜の上使が派遣された例は、『治家記録』ではこれ以後も承応2年、享保6年等に見られる。
- 31) 元禄13年の記事に見られる国分町検断太兵衛所は外人屋と判断される。注21参照
- 32) 仙台北藩主はその他にも外人屋を利用し（注20）、さらに、仙台北藩が招聘した高僧が仙台北へ到着した時や、藩主側室が仙台北を通過した時の宿泊、藩重臣の仙台北屋敷の代用等にも利用された例が若干見られるが、本稿では割愛した。
- 33) 『治家記録』には「於郷陸（＝六）別荘披ノ御祝儀」（元禄元年3月15日条）、「少（＝若）林茶屋場ノ北保春院南二別荘御造営」（元禄5年5月23日条）、「御宮町下屋敷作事落成」（元禄7年8月17日条）等の記事が見られる。
- 34) 『治家記録』による。最初の2回では小広間ではなく大広間と記されるが、この時期に二の丸には大広間は存在せず（文献7）、小広間の誤りと考えられる。
- 35) 『本陣の研究』（文献14）p.31にも「元来、本陣とはその経営者の住する母屋に、隣接して設立されるものであるから、厳密な意味においては、経営者の邸内の一部を指称するのである。しかしながら通例広義に解して、その邸宅の全部を本陣と称するようになった」とある。
- 36) この座敷には絵図上で部屋名の書き込みがなく、また、利用方法を知り得る史料も見出せない。萩、山口の御客屋は、仙台北外人屋には見られない町奉行所としての機能をも果たしていたので、仙台北外人屋と同様の性格の座敷であったか否かは明確でない。
- 37) 東海道筋に設けられていた將軍家の御茶屋や御殿は寛永～元禄年間に廃止され（丸山雅成『日本近世交通史の研究』吉川弘文館、1989、p.284）、庄内藩の鶴岡、清川、温海の御茶屋はこれより後の1700年代後半から1800年代初頭にかけて廃止され、毛利藩の上関御茶屋も天保～弘化年間には廃止されている（注3、注11）。

参考文献

- 1) 『仙臺市史』第1編、仙台市、1928.10
- 2) 『仙臺市史』第1巻、仙台市、1854.3
- 3) 『仙臺市史』第3巻、仙台市、1950.8
- 4) 『仙臺市史』第7巻、仙台市、1953.2
- 5) 『仙臺市史』第8巻、仙台市、1953.3
- 6) 『平栄三郎勲書』斎藤報恩会蔵
- 7) 佐藤功『近世武士住宅』葦文社、1979.8
- 8) 『明治天皇聖蹟志』、宮城県、大正14
- 9) 『伊達世家譜』（『仙臺叢書』続刊2～7巻、仙臺叢書刊行会、1933～35）
- 10) 阿刀田令造『仙台北城下絵図の研究』東洋書院、1976
- 11) 小倉強「仙臺の市街及び土木建築」（文献3所収）
- 12) 『瑞雲院殿御日記』（『一関市史』第6巻、一関市、1976.10 所収）
- 13) 大熊喜邦『東海道宿驛と其の本陣の研究』丸善、1942
- 14) 大島延次郎『本陣の研究』吉川弘文館、1955

（1999年3月8日原稿受理、1999年8月16日採用決定）